

自由論題6、報告3

報告テーマ

タイに見る天然ガス川下産業の競争力：マレーシア・インドネシアとの比較的地

“Competitiveness of Petrochemical Industry in Thailand:
A Comparative Perspective with Indonesia and Malaysia”

氏名（所属）

山口 健介（東京大学）

YAMAGUCHI Kensuke (The University of Tokyo)

要旨（800字程度）

天然資源を用いた川下産業部門における工業化は、オランダ病回避の観点からも資源国政府が用いる有力な開発戦略の一つと言われてきた。他方、資源を基盤とした工業化は「期待を下回る」ことが多いとも指摘される。本稿では、アジア通貨危機後、業績低下が危惧されるタイの天然ガス川下のプラスチック産業をとりあげ、競争力の観点からマレーシア及びインドネシアと比較することを通じて、「期待を下回る」メカニズムの仮説導出を目的とする。

プラスチック産業は、エチレンやプロピレン等の基礎化学品から、汎用プラスチック及びエンジニアリング・プラスチックが製造される。一般に競争力の源泉に関して、汎用プラスチックでは大規模生産による「規模の経済」、エンジニアリング・プラスチックでは多品種小ロットの「柔軟な生産」が重要とされる。本稿では、第1に代表的な汎用プラスチック5種を取り上げ、3国での生産量および自給率の過去20年の一次データを検証した。第2に、2018年断面での3国でのエンジニアリング・プラスチックの参入社数、生産種等を比較した。

第1に汎用プラスチックに関して、内需の伸びに設備投資が追いつかなかったマレーシアやインドネシアでは輸入が増加してきた。他方、タイでは特に世界金融危機まで大規模な設備投資に支えられ生産量、輸出量ともに増加してきた。現在、マレーシア・インドネシアの倍以上の生産規模である。第2にエンジニアリング・プラスチックに関して、参入社数（生産種）はタイの8社（7種）に対して、マレーシア及びインドネシアではそれぞれ8社（8種）と15社（6種）であった。

すなわち、タイが他の二国に持っていた、汎用プラスチック部門での比較優位は、エンジニアリング・プラスチック部門では失われている。この背景として、資源レントによる資本力に支えられたタイ石油公社を中心として、汎用プラスチック部門で進んできた寡占が、業界全体の高コスト構造を生んできてことに注目したい。結果、エンジニアリング・プラスチック部門の技術を有する外資等新規参入の障壁が生まれていると思われる。

今後、レントに着目した仮説的メカニズム—資源レントが独占を目的としたレントシーキングの原資となる結果、独占を通じて経済パフォーマンスの低下に繋がらう—の汎用性を検討してみたい。